



# 帰牛原遺跡十萬山地区

—縄文中期・弥生後期の集落を中心とした—

埋蔵文化財発掘調査報告書

1979. 11.

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

# 帰牛原遺跡十万山地区

—縄文中期・弥生後期の集落を中心とした—

埋蔵文化財発掘調査報告書

## 序

農業の近代化を図る為、農地の基盤整備、団地化等の第2次農業構造改善事業が、昭和51・52年度事業として埴牛原地区で実施されることになり、昭和51年度においては圃場整備、区画整理事業が実施され、之に伴う埋蔵文化財発掘調査を城本屋遺跡を中心として実施し、縄文・弥生時代の住居址、土器・石器等多量の出土を見ることができ、学術上大きな成果を収めることができました。

昭和52年度においては、造成地区の圃場整備事業が実施されたが、埴牛原遺跡十萬山地区としてかねてから、縄文・弥生時代の埋蔵文化財包蔵地として確認されていたので、文化財保護の見地から工事実施に先立って発掘調査を行ないました。

この地区は第1次農業構造改善事業として農道整備の際確認されたところであり、調査の結果は縄文・弥生両時期の住居址が発掘され、之に付随した土器、石器も多量に見えられ、特に銅鍬は極めて貴重なものでありました。

十萬山は昨年調査した城本屋遺跡を中心にしてこれを取りまく外周遺跡であり、2年続いた調査により、埴牛原遺跡の全容を確認することができましたことは、極めて大きな成果であり意義深いものを感じます。

この報告書出版にあたり、発掘調査、報告書作成に格別のご盡力を下さいました佐藤魁信調査団長を始め、調査員、作業員、構造改善実行委員会、土地所有者等関係下さいました各位に、衷心より厚く御礼を申し上げます。

昭和54年11月

番木村教育委員会

教育長 下 岡 輝 男

# 例 言

1. 本書は昭和52年度、喬木村農業構造改善事業埴牛原第二次計画に伴う埴牛原遺跡十萬山地区の発掘調査報告書である。
2. 本書は各面からの制約があり、調査範囲も一部分にとどまり、調査結果も十分な検討、研究がなされず、資料提供と問題提示の報告書となっている。
3. 昭和55年度施工予定の畑准水工事による立合調査によって遺跡の規模を知ることのできる予想のもとに本書は遺跡の一部分の資料提示に終わるものである。
4. 本書の編集及び執筆は佐藤が担当した。
5. 写真は佐藤が、遺跡実測図作成は佐藤・牧内が、遺物の作図は佐藤、遺構・遺物の製図は田口・佐藤が分担した。
6. 遺構番号は1970年調査をAとし、本次調査にはBを付すことにした。
7. 遺構実測図のうちピット内、または横に記してある数字は床面からの深さをcmで、遺物出土状況は床面からの高さをcmで（床面出土は数字を略してもいる）あらわし、縮尺は図示してある。
8. 遺物は喬木村歴史民俗資料館に保管してある。

# 目 次

序	1
例 言	2
目 次	2
遺物図目次	3
I 環 境	6
1. 自然的環境	6
2. 歴史的環境	7
II 発掘調査経過	9
III 発掘調査結果	10
(I) 遺構・遺物	10
1. 住 居 址	10
(1) 縄文時代中期中葉末	10
(2) 弥生時代後期	15
2. 柱列址・土塼	19
(II) 埴牛原遺跡十萬山地区B出土石器一覧表	21
IV ま と め	24
遺 物 図	26
図版 I 遺跡 II 遺構 III 遺物 IV 発掘スナップ	45
調査組織	
おわりに	

## 遺 物 図 目 次

図1	綿牛原遺跡位置図及び周辺主要遺跡図 (1: 50,000)	4
図2	“ 地形詳図及び周辺遺跡図 (1: 15,000)	5
図2の2	綿牛原遺跡十万山地区発掘地域図 (1: 1,500)	6
図3	綿牛原遺跡十万山地区B遺構図	10
図4	“ 十万山地区B3号住居址	11
図5	“ B4号 “	12
図6	“ B6号 “	12
図7	“ B7号 “	13
図8	“ B8号 “	13
図9	“ B10号 “	14
図10	“ B11号 “	14
図11	“ B1号 “	15
図12	“ B2号 “	16
図13	“ B5号 “	16
図14	“ B9号 “	17
図15	“ B12号、13号住居址	18
図16	“ B柱列址I	19
図17	“ B土壌1, 2, 3, 4号	20
図18	“ B土壌5号	20
図19	“ B3号住居址出土遺物 (1: 4)	26
図20	“ B4号 “ I (1: 4)	27
図21	“ B4号 “ II ( “ )	28
図22	“ B6号 “ ( “ )	29
図23	“ B8号 “ I ( “ )	30
図24	“ B8号 “ II ( “ )	31
図25	“ B12号 “ ( “ )	32
図26	“ B7号 “ ( “ )	33
図27	“ B11号 “ ( “ )	34
図28	“ B10号 “ I ( “ )	35
図29	“ B10号 “ II ( “ )	36
図30	“ 土壌B5号、1号出土遺物( “ )	37
図31	“ B1号住居址出土遺物 ( “ )	38
図32	“ B2号 “ ( “ )	39
図33	“ B5号 “ ( “ )	40
図34	“ B13号 “ ( “ )	41
図35	“ B9号 “ ( “ )	42
図36	“ B出土、土製品、小型石器、銅鉄 (1: 2)	43



- |          |          |             |          |          |
|----------|----------|-------------|----------|----------|
| 1. 埴牛原遺跡 | 2. 馬場平遺跡 | 3. 伊久間原遺跡   | 4. 阿馬遺跡  | 5. 城原遺跡  |
| 6. 伴野原遺跡 | 7. 林原遺跡  | 8. 林里遺跡     | 9. 田村原遺跡 | 10. 北原遺跡 |
| 11. 恒川遺跡 | 12. 寺所遺跡 | 13. 松尾南/原遺跡 | 14. 清水遺跡 | 15. 大原遺跡 |
| 16. 富田窯Ⅰ | 17. 富田窯Ⅱ | 18. 万場平遺跡   | 19. 地神遺跡 | 20. 川原遺跡 |
| A 郭Ⅰ号墳   | B 小川塚穴古墳 | C 飯山古墳      | D 塚穴古墳   | E 赤板古墳   |
| F 市場古墳   | G 高岡Ⅰ号墳  | H 靈影寺古墳     | I 妙前大塚   | J 代田獅子塚  |

図1 埴牛原遺跡位置図及び周辺主要遺跡図(1:50,000)



图2 綿牛原遺跡地形詳図及C周辺透視図 (1 : 15,000)

# I 環 境

## 1. 自然的環境

燗牛原遺跡十萬山地区は長野県下伊那郡喬木村燗牛原1613番地他に所在する。

長野県飯田・下伊那地方は東に赤石山脈が連なり、西に木曾山脈が聳え、その中間を天竜川が南下して、その両側に見事な段丘が発達している。天竜川の東岸一竜東地区は背後には赤石山脈の前面に中山性の伊那山脈が大西山(1741m)・鬼面山(1889m)・氏乗山(1818m)・金森山(1702m)となって赤石山脈と並走している。伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが、西面は数列の断層による起伏をもちながら段丘面が発達し、天竜川の氾濫原へとさがっている。天竜川の西岸一竜西地区に比し山麓からのびる扇状地は狭小で幅員も全般的には狭いが、豊丘村から喬木村にかけての段丘の発達は著しく、特に北から豊丘村の三次原、田村原、林原、伴野原、喬木村の城原、燗牛原、伊久間原、さらに飯田市下久堅の中尾、庚申原と続く中段段丘面の幅は広く典型的な段丘地形を形成している。

遺跡の所在する燗牛原は東西に近い方向(段丘面の中心線は $N70^{\circ}W$ を指す)に連なる段丘で標高490m~530mの伊那谷5段丘面で洪積中段段丘に位置づく。北には加々須川が流れ、西は天竜川の氾濫原をのぞみ、南は小川川の支流の鞍馬沢が流れており、川との高距は35m~77mに達し、段丘形成後の浸蝕が盛んであったことを物語っている。東方は伊那層よりなる丘陵となり、その一部が十萬山として南側の鞍馬沢に沿って、西にのびてきている。丘陵地と段丘面の東西は1700m、南北の最大幅は550mを測り、台地のほぼ中間部は、くびれて狭くなり南北幅250mとなる。このくびれ部の北東の滝ノ沢の崖端浸蝕による深い谷によって切られた舌状台地に城本屋遺跡があり、くびれ部の東一十萬山西裾より城本屋の東側は1段高位の扇状地形を形成し、水田化されている。くびれ部の西は中央部にやや低地帯が東西に走り、その先端部は崖頭浸蝕による深い谷となり、南原と中原とに分けている。南側は南原遺跡、北側は中原遺跡となっている。

しかし、これら3遺跡は同一段丘面上に立地し関連しあう遺跡であり、燗牛原遺跡群と総称するが妥当と思われる。

十萬山地区は、十萬山の西裾に東から西に三角形に広がる扇状地形をなし、西は南原へと伸びている。南は急峻な鞍馬沢の浸蝕崖で切られ、東は一段高位の扇状地となり、北は燗牛原西部中央部を走る低地帯に、南から北への緩い傾斜をもって接している。この低地帯はかつては滝ノ沢の崖端浸蝕進行前には東方にある丘陵地帯よりの湧水の流路となしていたものと推定される。

十萬山地区の地層は30~40cmの耕土と黒色土、10cm前後の暗褐色土があり、60cm前後のローム層があって地山の伊那層の礫層となる。



## 2. 歴史的環境

燗牛原遺跡における発掘調査は1970年の農道用地調査で、中原では方形周溝墓2基、十万山地区では縄文中期(中葉末)住居址2, 弥生後期住居址1, 弥生中期(阿島式)土壌1を発掘し、南原では1972年喬木第一小学校建設用地調査で方形周溝墓5基を発掘し、さらに城本屋では1976年農業構造改善事業に伴う調査で、住居址51(縄文中期末45, 縄文後期3, 弥生中期2, 平安時代1), 柱列址2, 土壌14, 貯蔵穴1, 祭祀址状遺構1を発掘し、多くの資料を得ている。燗牛原段丘面上の広範な範囲に縄文・弥生・平安時代にわたる集落が展開しているものと予想されている。台地の西端部に中原2号墳があり、径7m, 高さ2mの墳丘が現存し、ここより埴輪片, 直刀, 須恵器が出土したと「下伊那史第三巻」は述べている。この近くに中原1号墳があったが崩され、その跡はない。

燗牛原周辺の遺跡を概観すると、同位段丘面では、北にある城原遺跡は弥生後期の土器が瓦土を採る際に多くの出土をみており、その台地の先端部には中世の城原城跡がある。つづく伴野原は1977年調査では約90の住居址が発掘され、縄文前・中期, 弥生後期, 平安時代にわたって調査され、特に縄文中期末の環状集落の存在が確かめられ、パン状炭化物の出土で注目をあびている<sup>(9)</sup>。それより北に続く林原・田村原遺跡では1975・1976年の調査で縄文・弥生後期・古墳後期・平安時代の遺構が発見され、特に田村原の畑灌工事に伴うパトロールで各時期にわたる遺構・遺物が発見され、大遺跡であることが確かめられた。

燗牛原の南の同位段丘面では鞍馬沢を距て小川の場遺跡があり、未調査であるが縄文中期・弥生後期の遺物が発見されており、さらに南の伊久間原遺跡は、昭和27年農道開設時に縄文中期末住居址3, 古墳時代後期住居址9が調査され、また、旧石器ともみられる石器をはじめ縄文時代, 弥生中・後期, 古墳時代の遺物が多く表採され大遺跡として知られている。

燗牛原段丘崖下の遺跡には、北西の旧喬木第一小学校跡(現保育園)の郭遺跡では縄文中期末の完形土器の出土をみ、後期掘之内式土器の多くの出土をみており、1976年保育園建設時調査で弥生中期寺所式の住居址, 阿島式土器を伴う土壌が発見されており、この西端部に竜東地区唯一の前方後円墳郭一号墳があり段丘崖の中腹に朝顔花形円筒埴輪<sup>(9)</sup>の出土をみた郭5号墳が僅かに跡を残している。郭遺跡より一段下がった加々須川北岸の低位段丘面の阿島遺跡は弥生中期阿島式土器の標準遺跡である。加々須川南岸の低位段丘面には加々須川以南下段地域遺跡があり、古い須恵器・和泉式の土師器の出土をみており、未調査地域であるが弥生・古墳・平安時代にわたる主要な遺跡と予想される。燗牛原の南の崖下に里原遺跡があり、馬場平遺跡・田本平遺跡とつぎ、縄文・弥生・古墳・平安時代の遺物の出土をみており、特に馬場平遺跡では縄文前期から中期・後期・晩期, 弥生中・後期, 古墳時代の遺物の多くが中学校建設時に出土している。

喬木村の富田地区を除く古墳は37墳、そのうち16基は低位段丘面にあり、郭・里原・馬場平付近にあり、その他は段丘上, 段丘崖腹にある。現在残存する古墳は少なく、郭1号墳は前方部を欠き、小川塚穴古墳は封土は崩され石室を露出しており、里原1号墳・杉立古墳は墳丘を僅かに残す状態である。大原段丘端にある奴山古墳群は6基の古墳があったが、1・3・4号墳が残存しており、古墳群の形態を残すものとして注目される。消滅古墳をふくめこれら古墳より形象埴輪片・円筒埴輪・鏡・玉類・刀剣・金銅装馬具類の出土をみたものもあり、竜東地区の古墳文化の中心地であったであろうことも推測される。

- 注1 大沢和夫・佐藤 「燻牛原」1971 喬木村教育委員会  
 注2 佐藤 「燻牛原南原遺跡」1973  
 注3 喬木教育委員会 「燻牛原城本屋」1977  
 注4 市村威人 「下伊那史第3巻」  
 注5 豊丘考古学研究室 「伴野原遺跡概報」1977  
 注6 佐藤・今村正次・酒井幸則他 「田村原遺跡」1974 豊丘村教育委員会  
     「田村原・林原遺跡」1975 豊丘村教育委員会  
 注7 今村正次 「田村原遺跡パトロール概報」 豊丘村教育委員会  
 注8 大沢和夫・今村善興 「長野県下伊那郡喬木村伊久間原住居址」 信濃4/12  
 注9 市村威人 「郭5号墳」 下伊那史第3巻  
 注10 宮沢恒之・佐藤 「喬木村阿島遺跡」1967 長野県考古学会誌第4号

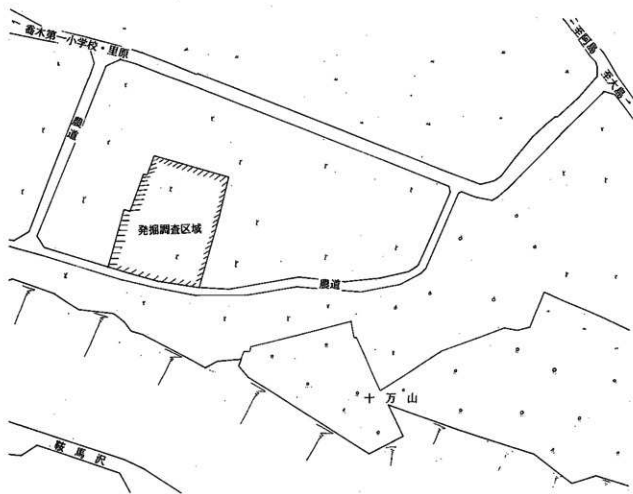


図2の2 燻牛原遺跡十万山地区発掘地域図(1:1,500)

## Ⅱ 発掘調査経過

昭和52年度高木村農業構造改善事業畑牛原第二次は15.1haが行なわれることになり、この計画の中に十万山地区の遺跡中心部が含まれ、このため工事着工前に発掘調査をなし、記録保存することになったのが本次調査である。調査区域は1970年調査により発掘した遺構に隣接する桑畑1500㎡に主体をおき調査を行い、隣りあう畑は作物の関係で調査不能であったが工事が基盤整備に重点が置かれず、桑の抜根のため破壊が最小限度におさえられたことが幸であった。なお工事中パトロールをなし、遺物・遺構の調査を行うことにしたものである。

### 発掘調査日誌

月・日	天候	日誌
11・5	くもり・晴	器材運搬・テント設営、ブルドーザーで桑株抜根(午前) 午後より遺構検出にかかり、1号・2号住居址検出
・6	雨	休み
・7		排土作業 — 前夜までの雨で土粘ばり苦勞する。 3号・4号・5号・6号住居址と土壌群を検出する。
・8	はれ・ 午後時々雨	7号・8号住居址検出、1号・2号・5号住居址の調査にかかる。
・9	はれ	1号・2号・5号住居址調査、5号住に切られるとみる縄文中期住居址?
・10	はれ	調査 3号住居址調査 — 炉址を発見するが壁は削られてなし。
・11	はれ・寒い	完掘・測量 完掘・測量 5号・6号・7号住居址調査
・12	はれ・朝凍る	4号住居址調査 完掘
・13	くもり・雨	日曜日 休み
・14	はれ	調査・掘り上げ・測量、8号・9号住居址検出。 測量
・15	くもり・はれ	8号住掘り上げ、測量。9号住調査、覆土は深く苦勞。柱列址Iを検出・調査・測量
・16	くもり・雨	午後より雨、作業中止。 調査。 5号住の下部に10号住を検出調査、盛土にかかり排土作業。 土壌1～5号検出、調査、掘り上げ。
・17	大雨	休み
・18	はれ	10号住掘り上げ、9号住調査床面に至り、銅鏝の出土をみる。11号住検出
・19	はれ	12号住検出 調査、炉址を検出、完掘。土壌1～5号測量、調査
・20	はれ	日曜日 休み
・21	はれ	13号住検出・12号住を切り、12号住は1部を残すが、プラン不明。 9号・10号住測量、完掘測量
・22	くもり・ 時雨あり	調査・完掘測量、 午後 テント、器材の撤収

### Ⅲ 発掘調査結果

#### (I) 遺構・遺物

昭和52年度埴牛原遺跡十万山地区で発掘調査した遺構は次のようである。(図3)

住居址 13 (縄文時代中期中葉末8, 弥生時代後期5)

柱列址 1

土 塼 5

遺構番号は昭和45年(1970)調査で縄文中期(井戸尻Ⅲ式)の住居址2, 弥生後期(中島式)住居址1と弥生中期(阿島式)土塼1を発掘しており, 今次調査遺構についてはB1・2…住居址とBを付すことにした。

#### 1. 住 居 址

##### (1) 縄文時代中期中葉末

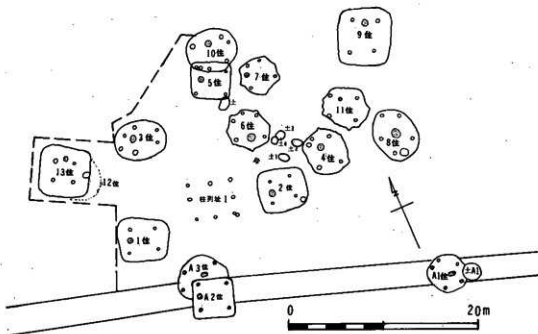


図3 埴牛原遺跡十万山地区B遺構図

### B 3号住居址 (図4)

調査区域の北西端部に発見され、壁は耕作によって削られ僅かにその痕跡を残すものであった。南北4.25 m、東西5.15 mの楕円形をなし掘りこみの深さは不明であるが、ローム層に掘りこむ堅穴住居址である。床面はあまり堅くなく、支柱穴は5ことみられ、炉址は中心部より西に片寄っており、石囲炉であるが北側の石ははずされ、その痕跡を残している。

遺物(図19)は少なく、耕作によって除去されたものが多いとみられる。1の深鉢は上半部を完全に残し、器形を知ることのできるもので、波状口縁をなし、地文に縄文を施し、細い粘土紐の貼布による方形の区画文と、楕形文の退化を示す半円文によって飾られ、当地方では類例の少ない土器がある。2・4の把手、3の土偶胴部がみられ、縄文中期中葉末の土器を主体とするものである。3の土偶胴部には細線による絵画的なものが施されて注目されるが不明である。

石器には打石斧・横刃形石器・石ヒ・石錐がある。(石器一覽表参照)

### B 4号住居址 (図5)

東3 mにB 8号、北東1 mにB 11号、北西2.6 mにB 6号の同一期の住居址があり、南北4.85 m、東西4.3 mの変則的な楕円形をなし、5か所に突出部をもち、ローム層に20~30 cm掘りこむ堅穴住居址である。柱穴は5こ検出されているが、支柱穴は4ことみられ、柱穴の1こより完形の深鉢の出土をみている。床面は堅く、炉址は中心より北々西に片寄っており、円形をなす小形の石囲炉である。

遺物(図20・21、図36の1~3)は床面出土が多く、土器には深鉢と浅鉢があり、細い粘土紐の貼布による文様構成をなすが主体となる。図20の1は柱穴より出土の完形の深鉢で口径21.1 cm、高さ25.5 cm、胴上半部には剣形状の粘土紐の貼布による区画文の内部を交互に竹筧による沈線の綾形文で飾り、胴くびれ部の下に楕形文を施している。2は口縁部に4この突起をもち、細い粘土紐の貼布による文様構成をな

すこの期の代表的な文様であり、3・4にみる陸帯による区画文を半截竹筧の沈線で埋める文様が共存してみられる。覆土出土の図21の22~24は勝板式にみられる典型的な文様であり前者との共存が当地方の縄文中期中葉末にみられる様相とみたい。

石器には打石斧・横刃形石器・石ヒ・石錐・凹石・磨石がある。(石器の一覽表参照)

土製品には図36の

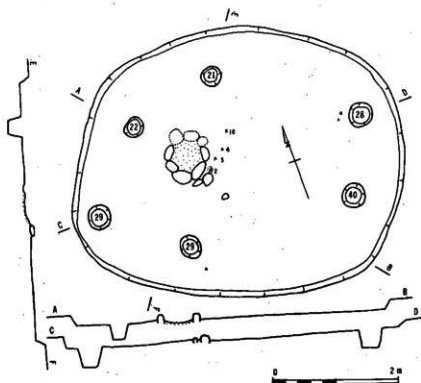


図4 綿牛原遺跡十萬山地区 B 3号住居址

1・2のミニチュア土器と図21の34~36の耳栓がある。

#### B 6号住居址 (図6)

南東2.6 mにB 4号, 北1.8 mにB 7号の同時期の住居址に隣接し, 南北4.1 m, 東西4.2 mの円形であるが, 8か所に突起部をもち, 八角形の変形ともみられる。30cm前後の深さにローム層に掘りこむ堅穴住居址である。床面はあまり堅くなく, 主柱穴は5こ, 壁に沿って配置され, 炉址は中心部より西側に片寄っており, 石囲炉であったが石ははずされ, その痕跡を明らかに残している。

遺物 (図22・図36の4~5) は比較的少ないが図22の1~3は細い粘土紐の貼布による文様構成であり, 1・4~6には梯形文がみられる。石器には打石斧・石ヒ・小型磨石斧・石鎌があり, 図22の25は台石とみられる。(石器一覽表参照)

#### B 7号住居址 (図7)

B 6号住居址の北1.8 mにあり, 北西1 mにB 10号の同時期の住居址がある。径4 mの不整形な円形をなし, 5か所に突出部をもち, ローム層に25cm前後掘りこむ堅穴住居址である。床面はあまり堅くなく, 主柱穴は5こ壁に沿って配置されている。炉址は西側に片寄っており, 地床炉である。

遺物 (図26) は少なく, 1の床面出土の深鉢は口縁部は無文, 胴上半部に渦文と梯形文の横帯

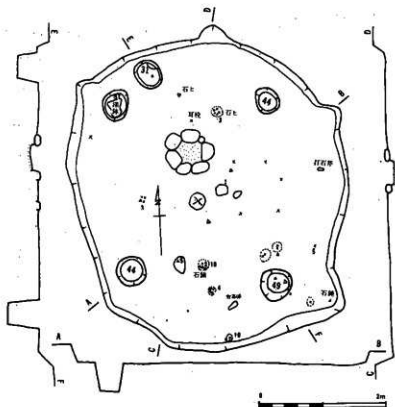


図5 湯牛原遺跡十萬山地区B 4号住居址

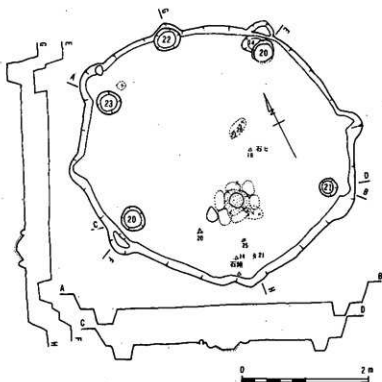


図6 湯牛原遺跡十萬山地区B 6号住居址

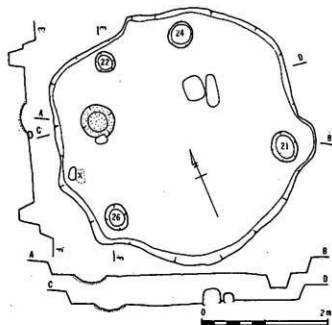


図7 埴牛原遺跡十万山地区B7号住居址

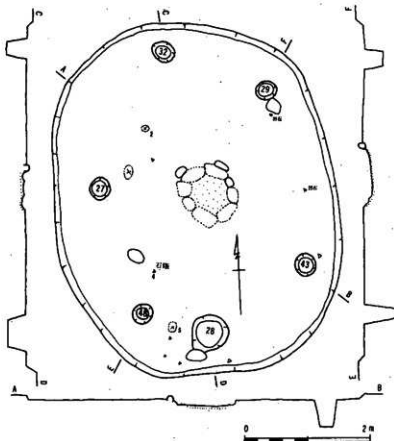


図8 埴牛原遺跡十万山地区B8号住居址

文、胴くびれ部下に櫛形文を施すものであり、本址の時期を決めるものである。他は小片のみであり、5の平出Ⅲ類Aも含まれている。石器には打石斧・横刃形石器・敲打器・石鏝がある。(石器一覧表参照)

#### B8号住居址(図8)

同時期のB4号住居址の東3m、B11号住居址の南東70cmにあり、南北5.53m、東西4.5mの楕円形をなし、壁は耕作によって削られ、ローム層に10cm前後の深さを残す窪穴住居址である。床面はあまり堅くなく、柱穴は6こ発見されているが、主柱穴は5こみられる。炉址はほぼ中央部にあり、石囲炉とみられ、石をはずされた痕跡を明らかに残している。

遺物(図23・24・36の7・8)は土器に比し石器の出土量が多い。土器では図23の1は当地では類例の少ないもので美濃地方の影響のものかと思われる。2は平出3類Aであり、井戸尻Ⅲ式に比定される土器がみられ、覆土出土の10の胴下部には瘤状の突起がみられる。石器には打石斧・磨石斧・横刃形石器・石鏝・凹石・石鏝があり、(石器一覧表参照)特に図23の12・13、図24の1・2の大型の打石斧があり、その用途については今後の究明すべき課題である。

#### B10号住居址(図9)

弥生後期のB5号住居址が南側の1部の上に張床を

もつてのり、南東1mにB7号住居址がある。本址の北は1段低位となり、低地帯をなす水田帯へ緩い傾斜をもって続き、そこよりの遺構発見はなかった。

南北4.95m、東西5.3mの円形をなし、3か所に僅かな突出部をもち、ローム層に30~40cmの深さに掘りこむ堅穴住居址である。床面は堅く、柱穴は6つ発見されている

が、その配置からみて主柱穴は4つと思われる。南側に壁に接して浅い掘りこみと小柱穴があり、出入口をなすものとみられる。炉址は中心より北に片寄っており、石囲炉であるが南側の石ははずされ、その痕跡を残している。

遺物(図28・29)は比較的多く、土器はキャリパー形の深鉢で、図28の1・2のB4号住居址出土の図20の1と同モチーフによる隆帯と沈線による絞杉文の組合せにより胴上半部を飾るものであり、3~5・7は細い粘土紐の貼布による文様構成をなすものである。覆土出土の8は無文、9は口縁部に突帯をめぐらす深鉢である。

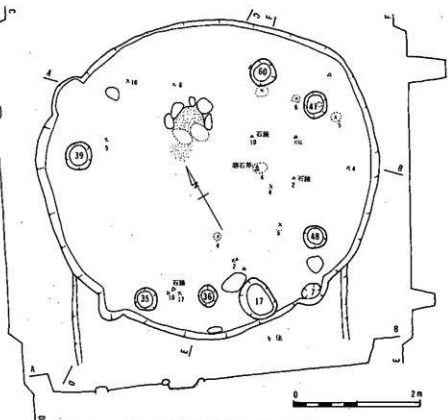


図9 船牛原遺跡十万山地区B10号住居址

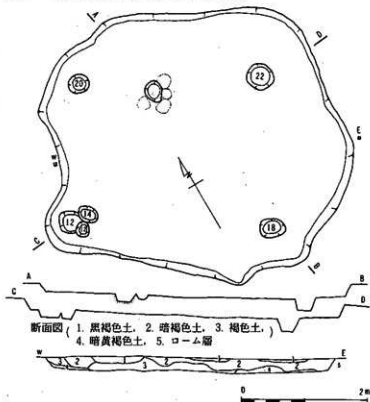


図10 船牛原遺跡十万山地区B11号住居址



石器には打石斧・磨石斧・横刃形石器・石錘・凹石・磨石がある。(石器一覧表参照)

### B 11号住居址 (図10)

南西1 mにB 4号, 南東1 mにB 8号の同時期とみる住居址があり, 南北4.1 m, 東西4.65 mの不整形な円形をなし, 4つの突出部をもち, ローム層に約20cm掘りこむ堅穴住居址である。床面はあまり堅くなく, 主柱穴は4こ, 炉址は中心より北に片寄っており, 小形の石囲炉であったとみられ, 石のはずされた痕跡を残している。

遺物(図27)は少なく, 床面出土の1は縄文前期末の土器で混入品とみられる。2は平出Ⅲ類A, 3~5は井戸尻Ⅲ式に比定される土器である。石器は打石斧と10の台石とみられるがあるが用途不明である。(石器一覧表参照)

### B 12号住居址 (図15)

弥生後期のB 13号住居址に大半は切られ, 東側に残る部分は耕作によって荒らされ, そのプランを知ることはできなかった。僅かに床面の堅さを部分的に認めたにすぎない。

遺物(図25)は比較的多くみられているが耕作による攪乱がみられた。土器は膳板式の終末期を主体とするものである。石器は図示を省略したが, 打石斧・横刃形石器・石錘がある。(石器一覧表参照)

## (2) 弥生時代後期

### B 1号住居址 (図11)

北4.5 mにB 13号, 南3.5 mにA 2号の同時期の住居址があり, 1列に南北方向に並ぶ。南北4.5 m, 東西5.15 mの隅丸方形をなし, 北側で46cm, 南側で60cmとローム層に深く掘りこむ堅穴住居址である。中央部の覆土の中間部に断面図でみるように焼土塊がありその東側には木炭を含む褐色土, 黄褐色土等があり, 上部に何らかの遺構があったとみられたが, 遺物もなくその性格を知ることではできなかった。床面は堅く, 主柱穴は4こ, 炉址は西側の柱穴間

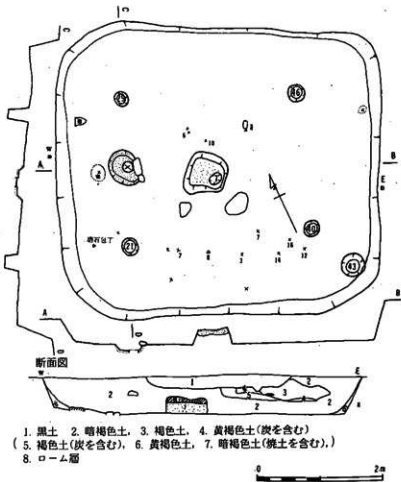


図11 船牛原遺跡十萬山地区B 1号住居址

の中央部にあり埋燵炉で、東側に枕石を置いている。

遺物(図31・36の9)は比較的多く、土器には壺、甕、高杯がある。壺形土器は5の胴下部から底部と7の4分の1円心円弧文の肩部片のみである。甕形土器は口縁部の強く外反する中島式の特徴をもち無文の2を除き櫛描による波状文と斜行短線文の組合せにの文様構成をなすものである。3は炉壁で口縁部を欠いている。高杯は脚部のみで8は3孔を有し覆土出土の12は無孔である。

石器には9の床面出土の1孔の磨製石包丁があり、覆土出土の13・14は石剣、15は磨石斧で、ともに基部を欠くものである。(石器一覧表参照)土製品に図36の9のミニチュア土器がある。

#### B 2号住居址(図12)

調査区域のほぼ中央部に発見され、同時期の1号住居址の東10mに、この中間に柱列址1がある。南北4.47m、東西5.1mの隅丸方形をなし、北壁で36cm、両側で49cmローム層に掘りこむ堅穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ、炉址は西側の柱穴間の中間部にあり、埋燵炉である。南東隅に貯蔵穴と

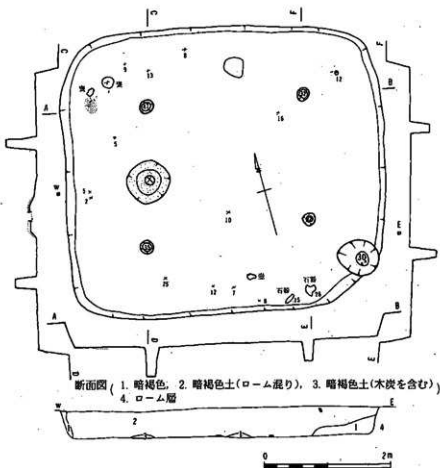


図12 燔牛原遺跡十万山地区B 2号住居址

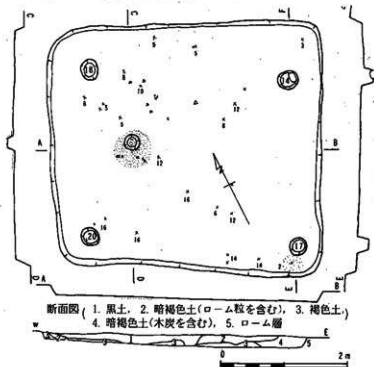


図13 燔牛原遺跡十万山地区B 5号住居址

みる掘りこみがある。

遺物(図32)は多く、土器は中島式を主体とし、壺、小形壺、甕、高杯がある。床面出土の6は完型の小形壺で、口径7.5cm、高さ11.6cm、口縁部はくの字状に外反し、波状文が、頸部は横線文、肩部に4分の1同心円弧文を施す類例の少ないものである。7は胴部はソロバン玉状をなし脚台をもつ小形壺とみられ、頸部に櫛状具による羽状文が施され、胎土は白ぼく、長床式の東海地方よりの移入品である。壺形土器には床面出土の9の口縁の立上がり部と、覆土出土の11~15の横線文、4分の1同心円弧文の組合せをなす破片がある。甕形土器には床面出土の1~3の完型品と4・5、炉甕の10、覆土出土の18・19があり、2・3の無文の外は波状文のみと、波状文と斜行短線文の組合せがみられ、2を除き口縁部は強く外反し中島式の特徴を表している。高杯には8の脚部と17の杯部がある。

石器には20の有肩扇状形石器と21の大型打石斧の出土をみている。(石器一覧表参照)

#### B 5号住居址(図13)

調査区北西隅端に発見され、北側の1部は縄文中期の10号住居址の上に張床をなしている。南北4m、東西4.3mの隅丸方形をなし、20~30cmの深さにローム層に掘りこむ堅穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ、炉址は中心部より西に片寄っており、この期の住居址の一般的にみる柱穴間の中間部にある

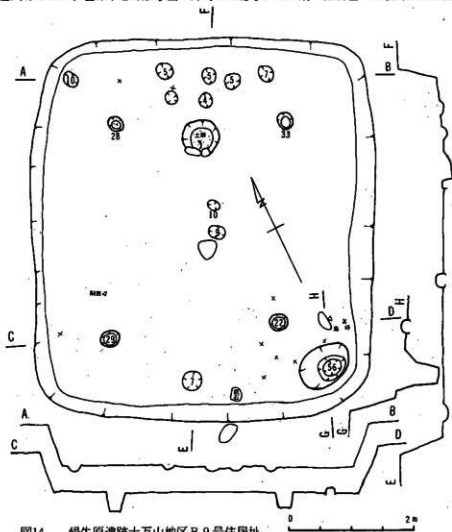


図14 燗牛原遺跡十萬山地区B 9号住居址

のと異なり、西側の柱穴間の中間部から東に寄っており、床面上に円形に焼土をもち、その中央部に柱穴状の掘りこみがあり炉甕の抜かれた跡とみられた。床面出土の土器は炉址の焼土範囲に集中して出土をみている。南東隅の柱穴に接し円形の焼土がみられ、ここよりも土器片の出土をみている。

遺物(図33)は少なく、土器には壺と甕があり、壺形土器は破片のみであるが、文様は波状

文と横線文の組合せとなり、頸部の横線文の下は無文となる3の例もあり、甕形土器は5～7にみる無文が主体となり、中島式の終末期にみる形態である。石器には10の打製石包丁が北壁より出土をみている。(石器一覧表参照)

#### B 9号住居址 (図14)

調査区の北東端に発見され、B 5号住居址の東11.3 mにある。南北6.04 m、東西5.4 mの隅丸方形をなし、60～75 cmと深くローム層に掘りこむ大型の堅穴住居址である。床面は堅く支柱穴は4こ整った配置にあり、炉址は北側の支柱間の中間部にあり南側に枕石を置き、埋燵炉であったものとみられる。僅かに甕片の3分の1位が弧をもって置れているのみであり、炉甕が抜れたとみる痕跡は認められない。浅いピットが北側に7こと南側に1こ、中央部に2こがあり土器を据えた穴ともみられる。南東隅には貯蔵穴ともみられる掘りこみがある。

遺物(図35・36の10)は少なく、土器には壺・甕片と高杯の脚部があり、中島式の前半のものともみられる。石器には9の石鎌・10の打製石包丁・11の磨石斧と12の大形の用途不明の石器があり、13の砥石がある。(石器一覧表参照)

図36の10の銅鎌は南西側の柱穴より北35 cmの床面に発見された。推定の長さ3.2 cm、幅1 cm、厚さ0.3 cm、茎の長さ0.7 cmを測り、両側に3こずつの孔を有しており、当地方における初見のものあり注目される。

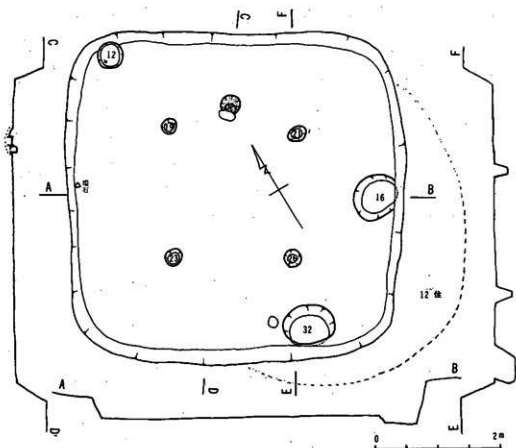


図15 綿牛原遺跡十万山区B 12号・13号住居址

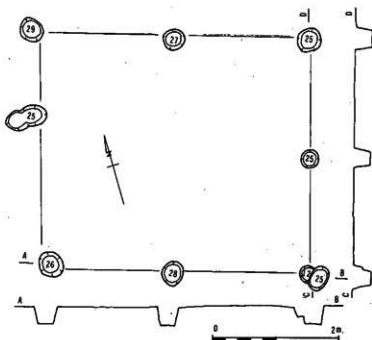


図16 埴牛原遺跡十万山地区B柱列址I

は中島式の終末期で、蓋、甕、高杯があり、壺形土器に2・6・7があり胴部は球状をなし、波状文と横線文の組合せとなり、壺形土器1の無文が器形を知るものであり、3・5の波状文、4の斜行短線文がみられるが刷毛目整形痕がみられる。9の高杯の脚部は無孔である。

石器には西壁に密着して10の環石が出土し、床面出土の大形横刃形石器と覆土より12の打石斧がある。(石器一覧表参照) 東側覆土より縄文期の石器が多量に出土をみており、12号住居のもの耕作による混入とみられる。

## 2. 柱列址・土城

### (1) 柱列址

#### 柱列址I (図16)

B1号住居址とB2号住居址の中間にあり、2間×2間の掘立の建物址であり、遺物は僅かに弥生後期中島式の小片の出土をみているが図示できるものはない。弥生後期の倉庫址ともみられる。

### (2) 土城 (図17・18)

南東にB4号住居址、北西に6号住居址の間に土城B1号～B4号があり、B6号住居址の北に土城B5号があり、いずれも縄文中期中葉末のものともみられるがB3・B4号には出土遺物はなく、その時期を断定できないが、他の土城との関連からみて同一時期と考えたい。これら土城を一覧表で示すことにした。

### B13号住居址 (図15)

B1号住居址の北4.7mにあり、調査区域の西にあって、作物の収穫をまって調査したものである。12号住居址の西側の大半を切り、その下部に構築され南北5.2m、東西5.3mの隅丸方形をなし、北壁で40cm、南壁で50cm余ローム層に掘りこむ堅穴住居址である。床面は堅く、支柱穴は4こであり、いずれも壁より1m余内側にはいてあり、小さく浅い。炉址は北側の柱穴間の中間部をやや北に寄っており、埋壺炉で南側に枕石1こを置いている。

遺物(図34)は少なく、土器

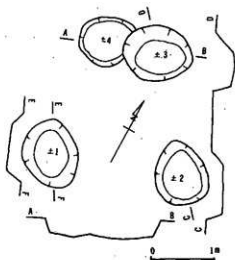


図17 埴牛原遺跡十万山地区B土坑1・2・3・4号



図18 埴牛原遺跡十万山地区B土坑5号

十万山地区土坑一覧表(表1)

番号	図番号	大きさ 南・北 (cm)	深さ (cm)	形状	主軸方向	遺物	遺物図 番号	備考
B 1	17	107 × 90	25	楕円形	N 40° W	横刃形石器1, 他に縄文中期中 葉末土器片3	30	
B 2	17	100 × 83	25	"	N 35° W	井戸尻Ⅲ式土器 片 3点	図なし	
B 3	17	86 × 112	32	"	N 76° E	なし	図なし	土B 4号を切る。
B 4	17	77 × 99	26	"	N 70° E	なし	図なし	土B 3号に切られ る。
B 5	18	193 × 98	37	長楕円形	N 30° E	井戸尻Ⅲ式の土 器片 数点	30	

## (II) 燔牛原遺跡十萬山地区B出土石器一覽表

打…打石斧, 槌…槌形石器, 敲…敲打器, 硬…硬砂岩, 凝…凝灰岩, 花…花崗岩, 黒…黒曜石

## (1) 縄文時代石器

遺構	図番号	No	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	備考	遺構	図番号	No	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	備考			
B3住		5	打	硬	13.6	4.5	170	床	B6住		22	13	石 錘	硬	6.3	4.3	62	床		
		6	槌	凝	11.2	3.3	118	"			14	槌	凝	6.3	4.2	56	"			
		7	局部 磨石斧	"	9.6	3.3	66	"			15	敲	硬	12.4	3.0	352	"			
		8	石 磨	硬	6.6	4.0	52	"			16	"	"	14.0	3.5	280	"			
		9	石 匕	チ ト	3.2	3.5	5	"			17	磨 石	花	10.5	5.6	900	"			
		10	打	硬	9.0	3.4	65	覆土			20	打	硬	10.2	2.7	45	覆土			
		11	槌	凝	11.1	3.9	80	上層			21	槌	"	5.7	6.3	56	"			
		12	槌	硬	5.7	10.0	100	"			22	"	"	6.2	7.0	55	"			
		13	"	"	7.2	5.2	40	"			23	"	"	5.2	7.0	41	"			
		14	"	"	6.2	5.3	50	"			24	石 錘	"	6.7	4.0	66	"			
		B4住		21	3	打	凝	16.5			5.6	390	床	25	磨 石	"	14.5	3.9	785	"
				4	"	硬	8.8	5.0			132	刃部欠け	26	4	石 匕	凝	7.4	2.2	22	床
				5	片面 磨石斧	凝	11.4	4.0			145	"	5	磨 石 斧	"	4.0	1.8	20	"	
				6	槌	硬	4.0	5.7			24	"	6	石 錘	黒	2.5	1.6		覆土下層	
7	"			"	4.0	5.0	20	"	B8住		23	12	打	硬	18.1	6.2	390	床		
8	"			"	4.5	8.0	65	"			13	槌	凝	18.7	6.6	915	"			
9	石 匕			文 灰 岩	4.6	6.9	26	"			14	磨 石	凝	16.1	5.1	420	"			
10	敲			凝	12.0	5.3	460	"			15	"	硬	12.2	5.0	205	"			
11	石 錘			硬	6.4	4.2	75	"			16	"	"	13.1	5.0	170	"			
16	磨 石 斧			凝	12.5	4.5	375	覆土下層			17	"	凝	13.5	4.0	165	"			
17	打			硬	10.2	4.0	70	"			18	"	"	11.7	4.5	115	"			
18	"			"	10.0	4.2	86	"			19	"	"	11.5	3.7	96	"			
19	磨 石			花	7.3	11.7	530	"			20	"	?	11.5	4.5	115	"			
20	石 錘			硬	4.7	4.0	36	"			21	槌	硬	6.0	9.1	88	"			
21	磨 石			花	7.6	9.1	495	"			22	"	"	6.7	7.0	73	"			
26	打			硬	12.4	4.9	95	覆土			23	磨 石	花	8.5	4.2	450	"			
27	"			"	10.5	5.2	73	"			24	1	打	凝	21.7	7.0	1160	覆土		
28	"			凝	14.2	4.5	170	"			2	"	硬	19.2	6.3	365	"			
29	"	"	11.0	4.2	73	"	3	"			"	13.3	5.5	225	"					
30	"	"	9.3	5.0	172	部分の欠 き	4	"			"	13.2	3.4	130	"					
31	石 錘	硬	3.8	4.0	27	"	5	"			"	10.0	4.8	83	"					
32	槌	凝	5.0	11.4	81	"	6	"			?	10.8	5.0	140	"					
33	"	硬	6.2	11.7	155	"	7	"	凝	8.6	5.0	70	"							
36	3	石 錘	黒	4.0			床	8	"	"	10.7	4.5	138	"						
B6住		22	9	打	硬	11.2	4.5	150	床	9	"	"	15.3	3.4	205	"				
		10	槌	"	8.0	7.1	110	"	10	"	"	12.6	4.0	165	"					
		11	"	"	6.5	5.7	92	"	11	磨 石 斧	"	11.4	5.2	265	刃部欠け					
		12	"	"	6.5	6.0	90	"	12	槌	硬	6.3	9.6	125	"					

遺構	図番号	No	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	備考	遺構	図番号	No	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	備考
B6住	24	13	槌	硬	5.7	7.6	63	覆土	B10住	29	19	槌	硬	5.4	9.4	64	覆土
"	"	14	"	凝	5.4	8.0	71	"	"	"	20	"	"	6.2	9.5	55	"
"	"	15	"	"	7.0	5.8	42	"	"	"	21	"	"	5.4	7.5	52	"
"	"	16	石 錘	硬	7.0	5.5	95	"	"	"	22	磨石	花	12.4	4.3	870	"
"	"	17	凹石	花	9.8	4.6	610	一面のみに 凹み	12住	なし	1	打	硬	10.8	4.8	140	
"	"	18	"	"	10.9	3.0	430	"	"	"	2	"	"	10.1	4.8	130	
"	36	7	石 鉄	玄武岩?	2.2	1.7		床	"	"	3	"	"	11.4	3.5	120	
"	"	8	"	瓦割	3.3	1.7		"	"	"	4	"	"	11.7	4.7	130	
B7住	26	7	打	硬	11.6	4.1	118	床	"	"	5	"	"	10.8	5.5	160	
"	"	8	"	凝	11.4	3.8	122	刀部欠け	"	"	6	"	"	13.4	5.6	236	
"	"	9	"	硬	9.3	4.5	135	"	"	"	7	"	"	9.3	3.5	75	
"	"	10	槌	凝	5.5	10.3	74	"	"	"	8	"	"	9.0	3.7	66	
"	"	11	"	硬	5.5	10.0	83	"	"	"	9	"	"	8.3	4.7	96	基部欠け
"	"	12	石 錘	"	5.3	4.3	43	"	"	"	10	"	"	12.2	4.5	112	
"	"	13	版	凝	7.4	2.0	35	"	"	"	11	粘板岩	"	9.8	3.5	64	
"	"	18	打	玄武岩	9.6	4.9	63	覆土	"	"	12	"	凝	12.5	4.2	230	
"	"	19	"	硬	9.0	4.0	76	"	"	"	13	"	"	12.9	4.3	135	
"	"	20	槌	"	5.9	8.0	220	"	"	"	14	"	"	10.2	4.5	100	
B1住	27	6	打	硬	11.5	5.0	150		"	"	15	"	"	10.1	4.7	108	
"	"	7	"	"	9.5	4.2	65		"	"	16	"	"	12.8	2.7	75	
"	"	8	"	凝	10.0	4.6	73		"	"	17	"	"	9.5	3.0	75	
"	"	9	"	"	12.0	5.0	160		"	"	18	"	"	11.4	3.4	95	
"	"	10	台石?	"	21.7	7.2			"	"	19	"	"	12.0	5.7	115	
"	"	11	打	"	17.4	6.0	710		"	"	20	槌	硬	6.7	9.2	81	他に打石斧刃部欠 (硬) 5
B10住	29	1	打	輝緑岩	21.8	5.5	1300	床	"	"	21	"	"	5.4	8.2	53	
"	"	2	"	硬	9.5	4.9	88	"	"	"	22	"	"	6.0	6.5	65	
"	"	3	"	"	11.8	5.0	140	"	"	"	23	"	"	5.0	7.6	52	
"	"	4	"	凝	12.4	4.5	122	"	"	"	24	"	凝	4.2	7.5	52	
"	"	5	"	"	11.8	3.7	122	"	"	"	25	"	"	5.3	6.4	63	
"	"	6	基部 磨石斧	"	11.3	3.7	120	"	"	"	26	石 錘	硬	6.8	3.6	60	
"	"	7	磨石斧	"	8.7	3.4	53	"	"	"	27	"	"	6.0	4.7	84	
"	"	8	槌	硬	5.0	7.2	40	"	"	"	28	"	"	5.2	3.7	41	
"	"	9	"	"	5.5	8.0	85	"	"	"	29	"	"	5.2	3.4	38	
"	"	10	"	凝	4.0	8.4	50	"	土B1	30	5	槌	硬	5.2	10.2	85	
"	"	11	石 錘	硬	4.5	3.9	42	"									
"	"	12	凹石	?	12.0	4.4	970	"									
"	"	13	磨石斧	輝緑岩	7.0	4.4	140	蓋土 刀部欠け									
"	"	14	打	硬	14.4	4.6	175	"									
"	"	15	"	"	13.8	5.0	105	"									
"	"	16	"	"	8.6	5.5	143	両端を欠く									
"	"	17	"	"	14.6	4.0	148	"									
"	"	18	槌	"	7.5	9.5	125	"									



## (2) 弥生時代石器

遺構	図番号	No	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	備考	遺構	図番号	No	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	備考
B1住	31	9	磨製 石包丁	凝	4.5	10.6	60	床 1孔	B13住	34	11	横 打	硬	10.6	14.2	250	床
"	"	13	石 鎌	硬		7.3	225	覆土 基部全欠く	"	"	12	打	硬	12.7	5.1	230	覆土
"	"	14	" "	"		8.4	240	" "	B9住	35	9	石 鎌	硬	9.3	7.1	295	床 刃部全欠く
"	"	15	磨石斧 チヤ 一ト	"		5.0	100	覆土下層	"	"	10	打製 石包丁	"	4.0	6.4	41	覆土
B2住	32	20	有刃部状 形石斧	硬	16.2	16.0	870	覆土下層	"	"	11	磨石斧	?	6.7	4.1	130	" 基部全欠く
"	"	21	打石斧	"	16.5	5.1	255	覆土	"	"	12	?	硬	25.1	9.7		床
B5住	33	10	打製 石包丁	硬	4.0	7.6	56	北壁	"	"	13	砥石	砂岩	28.4	12.0		"
B13住	34	10	磨状石器	凝	8.0	2.2	188	西壁									

## IV ま と め

燭牛原には段丘面のほぼ中央部から西側にかけて、城本屋、中原、南原等の遺跡が分布しており、これら各遺跡の調査が行なわれ、城本屋では縄文中期後半Ⅱ期からⅣ期へかけての住居址45、縄文後期住居址3、弥生中期住居址2、平安時代住居址1が発掘調査され、縄文中期末の大集落の存在が確かめられた。中原では方形周溝墓3基、南原では方形周溝墓5基が発掘され、十万山地区では縄文中期中葉末の住居址9、弥生後期住居址6・柱列址1、弥生中期阿島式土壇1等が発掘された。

数回にわたる調査結果によれば、燭牛原台地中央部のくびれ部の滝ノ沢の崖端浸蝕をのぞむ城本屋遺跡には縄文中期後半の集落があり、台地の西端部には中原遺跡と南原遺跡の間にある低地帯部と崖端浸蝕部をはさんで、未調査部が大部分であるが弥生後期の方形周溝墓群の存在が確認され、十万山地区には縄文中期中葉末と弥生後期の集落が存在し、各時代の集落のあり方、方形周溝墓群のあり方を知ることができた。これらよりして、現在燭牛原台地上の遺跡名が何個所かに分断されて呼ばれているが、同一台地上に展開された生活の場としてとらえ、燭牛原遺跡群として総称するが適切ではなからうか。

十万山地区では1970年の農道開設時に用地内の部分的な調査と今次農業構造改善事業に伴う調査が行われた。今次調査は作物の制約があつて1500㎡の範囲にとどめられたが縄文中期中葉末と弥生後期の集落の存在が確かめられた。この地域の工事は基盤整備は従たるもので桑株の抜根が主となったため遺跡の破壊は少なかったものと思われる。

縄文中期中葉末の住居址は径4～4.5mの円形の堅穴住居址であるが、3号、8号住居址は長軸5.5mの楕円形をなすが耕作によって壁の大半は削られ、その原形ははっきりしていない。住居址の形態は不整形の円形をなし、数箇所突出部をもち、炉址の方向は不定であり、7号住居址の地床炉を除き小型の石組炉であり、炉址のはずされた痕跡をもつものが多い。

土器はキャリバー型の深鉢を主体にし、細い粘土紐の貼布によって構成される口縁帯文で飾り胴くびれ部の下を帯形文をめぐらす一般的な文様構成である。8号、12号住居址は井戸尻Ⅲ式に比定される土器を主体とし、8号住居址出土の図23の1は美濃地方との関連を示す土器であり、平出Ⅲ類Aの伴出もみられている。

石器は床面出土の打石斧の量は比較的少なく、また大型の重量のあるものがみられており、石器の種類は多い。しかし井戸尻Ⅲ式を主体とした8号、12号住居址よりは打石斧の出土量が極めて多いことが注目される。(石器一覧表参照)

弥生後期の住居址は中島式前半にB1号、2号、9号住居址が、中島式後半にB5号、13号住居址があり、いずれも隅丸方形の堅穴住居址をなすが、その規模、構造に時間的な差違はみられない。いずれも埋壘炉をもつがその位置にも時間的な相違はなく、大半は西側の柱穴間のほぼ中央部に置かれているが、大型住居址をなすB9号、B13号住居址は北側柱穴間にあり、前者では銅鏝、後者では環石と特殊な遺物の出土をみたことに注目される。

土器は、壺形は立上り口縁部をもち肩部は球状をなすが一般的で、文様構成は前半では口縁部から頸部にかけて洗練された大きな波状文を、頸部には数条からなる横線文が、その下に波状文が施され、肩部に4分の1同心円弧文がつくが、後半になると頸部の横線文下の文様が省略されてくる。壺形は口縁部は強く外反を示すが特徴であり、波状文・斜行短線文の組合せが一般的であるが、後半になると斜行短線文が省略され、また無文化し、土師器への移行を示す時期とみられる。

石器は前半には石鎌・有肩扇状形石器・蛤刃磨石斧・磨製石包丁・打製石包丁等がみられているが、後半では石器は減少を示し、B5号住居址では打製石包丁1この土土をみただけであり、B13号住居址ではB12号住居址の混入もみられ弥生時代の石器と明らかにいえるものは環石1こである。

遺物で注目すべきはB9号住居址床面出土の銅鏃がある。両側に3個ずつの孔をもち、当地方では弥生時代の銅鏃として初見である。なおB2号住居址出土の長床式とみる脚台をもつ小型壺も稀にみるものである。

畑牛原遺跡において今迄の調査によって、城本屋では縄文中期後半の各期にわたる集落の存在が、十万山地区では縄文中期中葉末（井戸尻Ⅲ式比定）と弥生後期の集落の存在が確認されている。段丘面のやや南寄の東西方向にある低地帯の西端部に入りこむ崖端浸蝕部をはさんでの中原・南原には方形周溝墓群の存在が明らかにされており、これらの他に縄文前期、平安時代の遺構、遺物が発見されており、各時代、各時期の集落のあり方についての問題を提起するものである。

1980年には畑灌水工事が施工されることになっており、その立合調査によって畑牛原段丘面上の各時代、各時期の集落のあり方、その規模がさらに明らかにされるものと予想される。

本次調査は各面からの制約のもとに行われたもので、一部分の調査に終わっているものであるが予想以上の調査結果が得られ、また工事が桑畑抜根に重点がおかれたことが遺跡保存の上で幸であったと思われる。

調査にあたっては各方面からの御指導、助言が得られ、作業にあられた方々の献身的なお骨折りのあったことに深く御礼を申し上げたい。

(佐藤 魁 信)



图19 埴牛原遺跡十万山地区B3号住居址出土遺物(1:4)  
1~9……床, 10~11……覆土

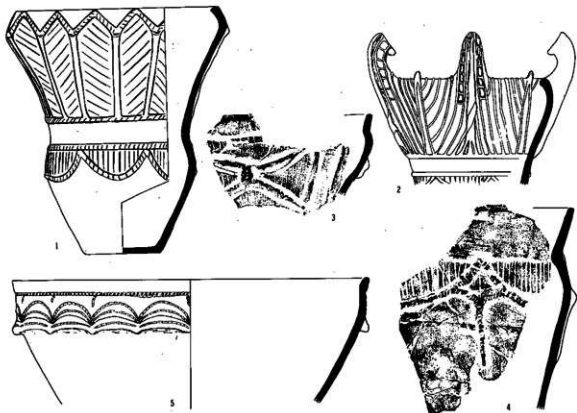


图20 埴牛原遺跡十万山地区B4号住居址出土遺物I(1:4)  
1~5……床面, ビット内

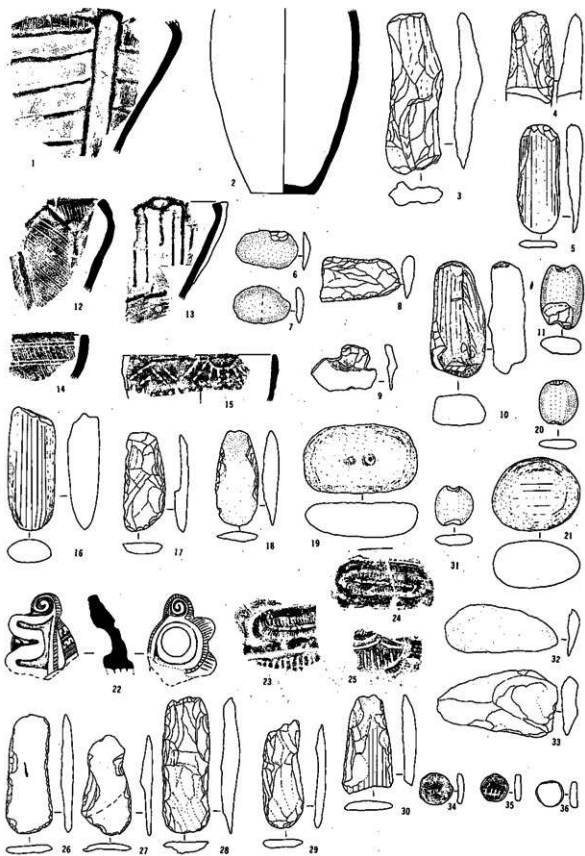


图21 犍牛原遗址十万山地区B4号住居址出土文物Ⅱ(1:4)

1~11……床, 12~21……覆土下層~床面, 22~36……覆土

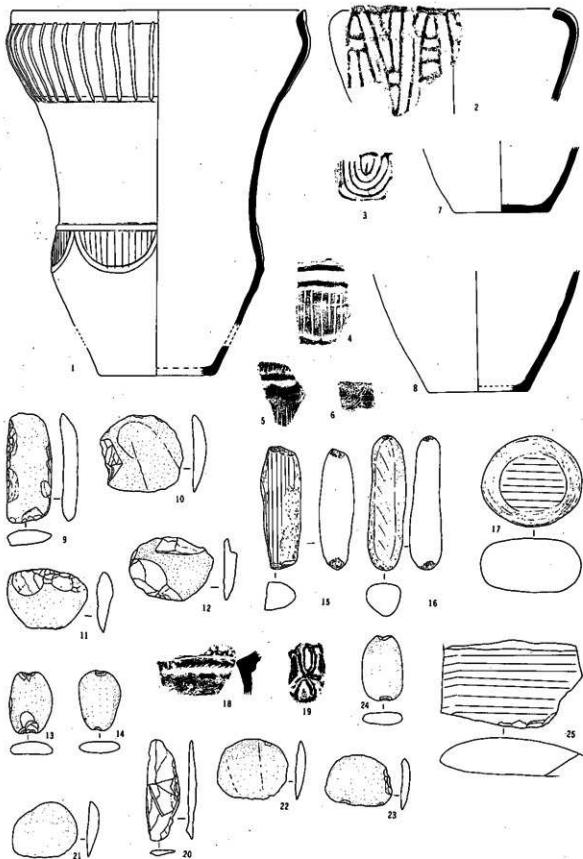


图22 牯牛原遗址十万山地区B6号住居址出土遗物(1:4)

1~17……床, 18~25……覆土

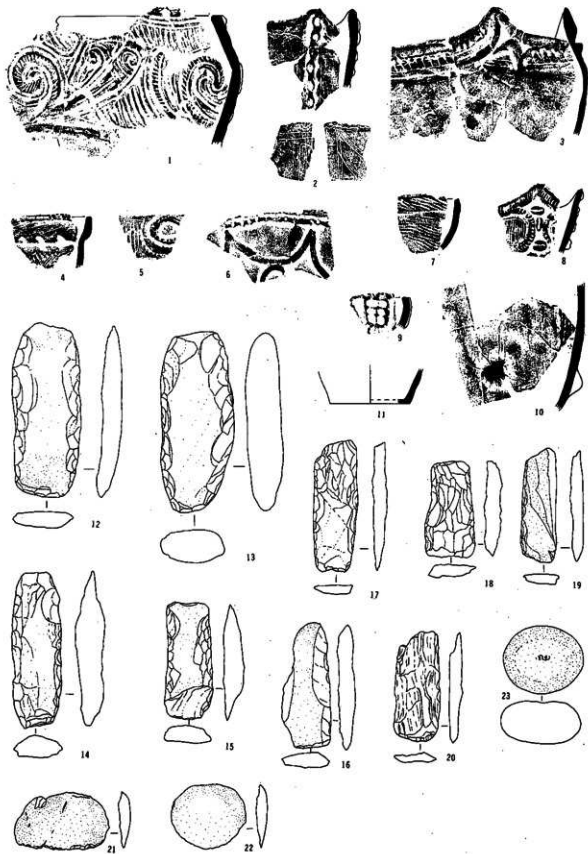


图23 犏牛原迹十万山地区B8号住居址出土物I (1:4)

1~6. 12~23……床, 7~11……覆土

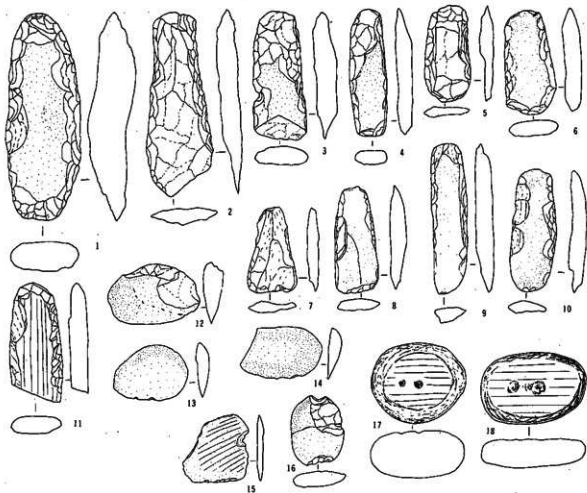


图24 绵牛原遗址十万山地区B8号住居址出土遗物Ⅱ (1:4)  
1~18……覆土



图25 绵牛原遗址十万山地区B12号住居址 (1:4)



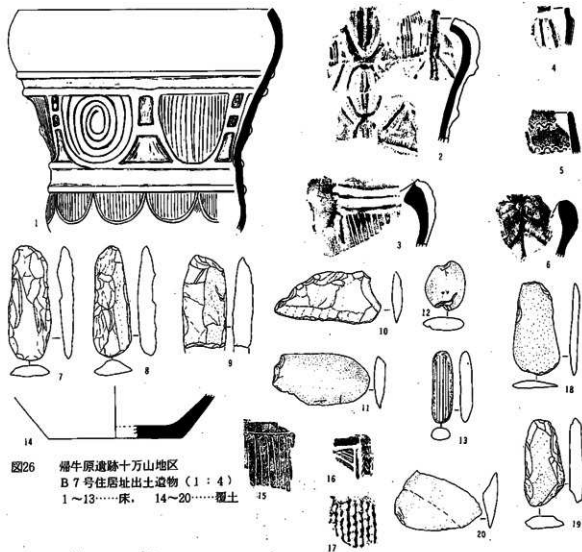


图26 绵牛原遗址十万山地区  
B 7号住居址出土遗物 (1:4)  
1~13……床, 14~20……覆土

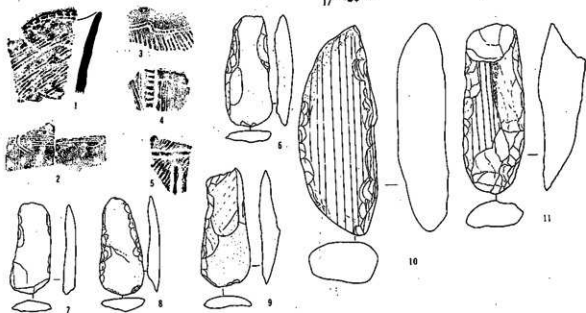


图27 绵牛原遗址十万山地区B11号住居址出土遗物 (1:4)

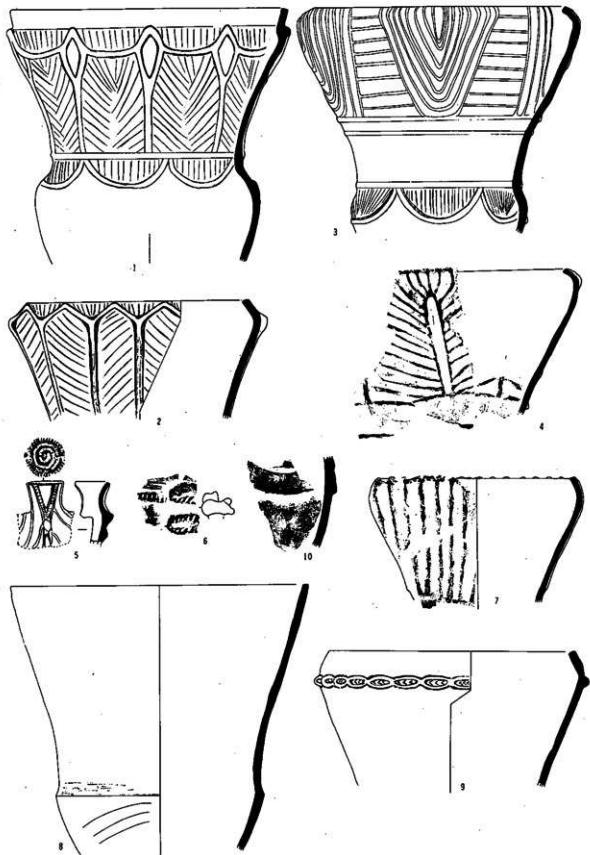


图28 犏牛原遗址十万山地区B10号住居址出土遗物 I (1:4)

1~6……床。 7~10……覆土下層

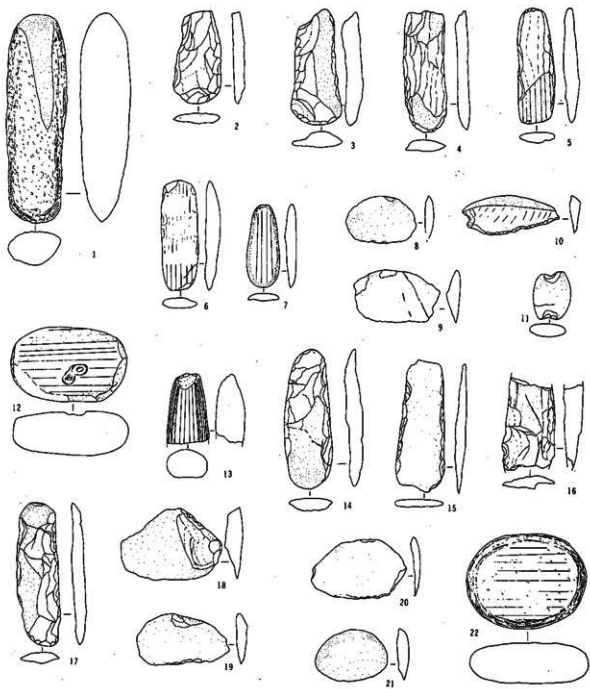


图29 绵牛原遗址十万山地区B10号住居址出土遗物Ⅱ(1:4)  
1~12……床, 13~22……覆土



图30 绵牛原遗址十万山地区土坑B5号·1号出土遗物(1:4)  
1~4……土B5号, 5……土B1号

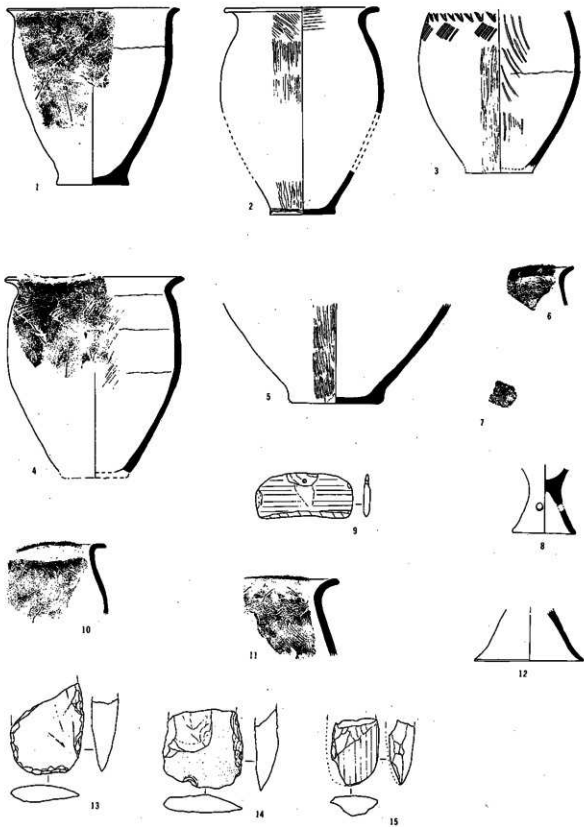


图31 埴原遺跡十万山地区B1号住居址出土遺物(1:4)

1~2, 4~9……床, 3……埴ガメ, 10~15……覆土

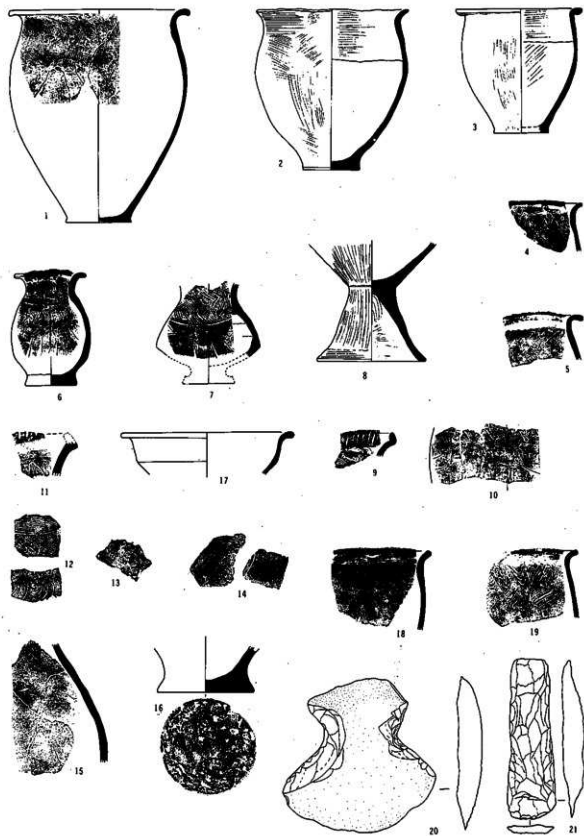


図32 湯牛原遺跡十萬山地区B2号住居址出土遺物(1:4)

1~9……床、10……炉ガメ、11~21……覆土下層及びピット内 35  
 (16・18……ピット)

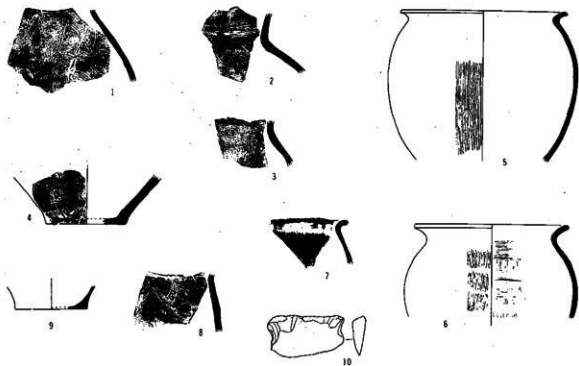


图33 绵牛原遗址十万山地区B5号住居址出土遗物(1:4)

1~9……床面, 覆土下层, 10……北壁

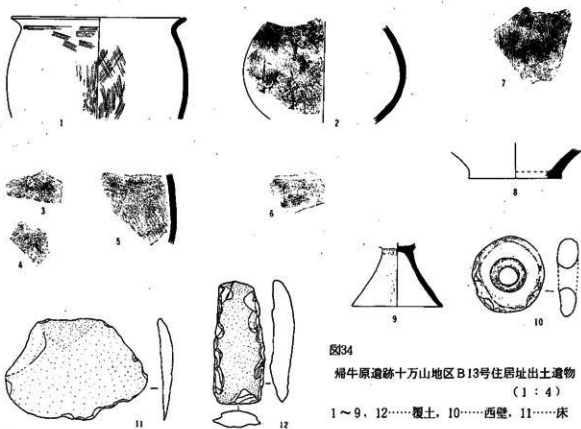


图34

绵牛原遗址十万山地区B13号住居址出土遗物  
(1:4)

1~9, 12……覆土, 10……西壁, 11……床



图35 埴牛原遺跡十万山地区B 9号住居址出土遺物 (1:4)

1, 2……炉ガメ, 3~7, 9, 12, 13……床,  
8, 10, 11……覆土

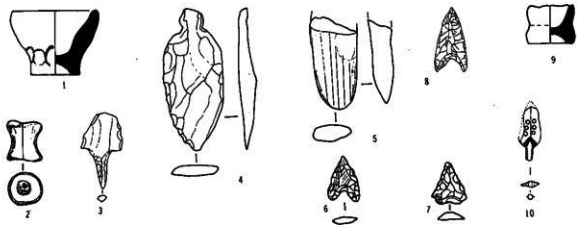


图36 埴牛原遺跡十万山地区B出土 土製品・小型石器・銅鏃 (1:2)

1~3……B4住, 4~6……B6住, 7, 8……B8住  
9……B1住, 10……B9住

図版 I 遺 跡



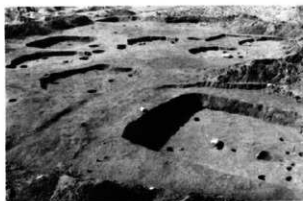
婦牛原遺跡十万山地区全景



婦牛原遺跡十万山地区近景

図版 II

縄文時代中期中葉末の遺構・遺物

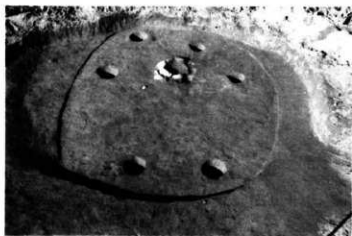


婦牛原遺跡十万山地区B遺構全景 — 東から



婦牛原遺跡十万山地区B遺構全景 — 西から





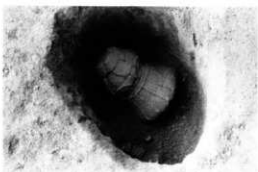
牯牛原十万山B 3号住居址



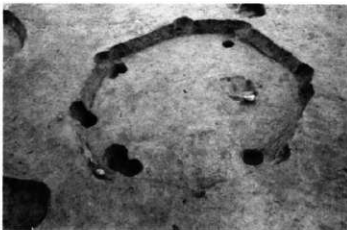
牯牛原十万山B 3号住居址炉址



牯牛原十万山B 4号住居址



牯牛原十万山B 4号住居址深钵出土



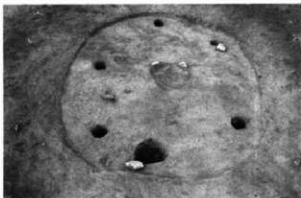
牯牛原十万山B 6号住居址



牯牛原十万山B 6号住居址石匙出土



埴牛原十万山B 7号住居址



埴牛原十万山B 8号住居址



埴牛原十万山B10号住居址

(右上, 左はB 5号址・右下はB 7号址)



埴牛原十万山B11号住居址



扁牛原十万山B 3号住居址出土深鉢



扁牛原十万山B 4号住居址出土深鉢



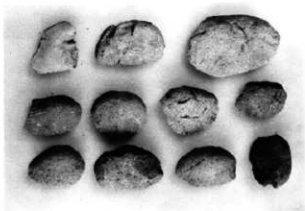
扁牛原十万山B 4号住居址出土深鉢



扁牛原十万山B 4号住居址出土石器



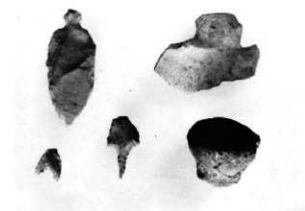
埴牛原十万山B 8号住居址出土石器 1.



埴牛原十万山B 8号住居址出土石器 3.



埴牛原十万山B 8号住居址出土石器 2.



埴牛原十万山B 出土 小形石器とミニチュア土器  
(右上・下・中B 4住, 左上・下6住)



埴牛原十万山B 12号住居址出土土器

図版Ⅲ 弥生時代後期の遺構・遺物



埴牛原十万山B 1号住居址



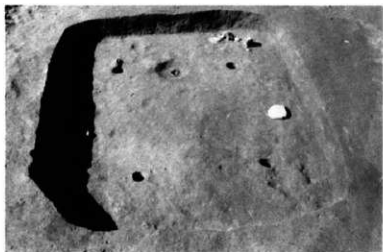
埴牛原十万山B 1号住居址炉址



埴牛原十万山B 1号住居址炉甕



埴牛原十万山B 1号住居址磨製石包丁出土



埴牛原十万山B 2号住居址



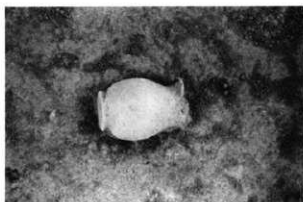
埴牛原十万山B 2号住居址炉址



埴牛原十万山B 2号住居址土器出土状況



埴牛原十万山B 2号住居址脚台付小型壺の出土



埴牛原十万山B 2号住居址小型壺の出土



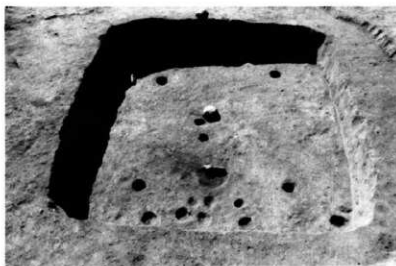
埴牛原十万山B 2号住居址甕の出土



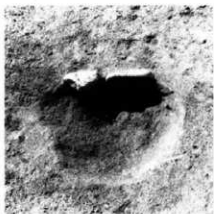
埴牛原十万山B 2号住居址有肩扁状形石器の出土



埴牛原十万山B 5号住居址



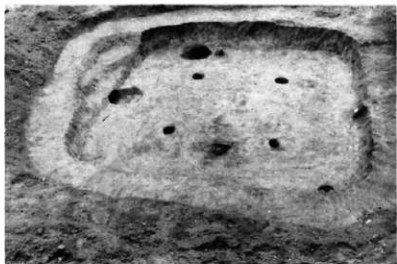
犏牛原十万山B 9号住居址



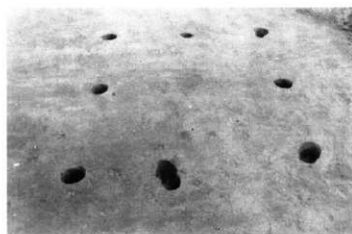
犏牛原十万山B 9号住居址炉址



犏牛原十万山B 9号住居址铜墩出土



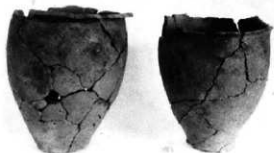
犏牛原十万山B 13号住居址



犏牛原十万山B 13号住居址炉址



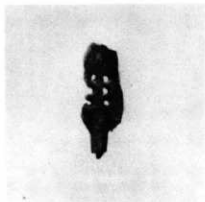
犏牛原十万山B 柱列址 1号



扁牛原十万山B 1号住居址出土甕



扁牛原十万山B 2号住居址出土甕



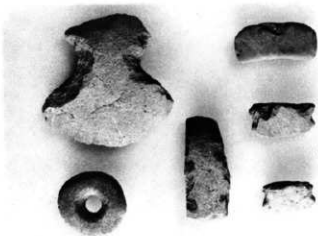
扁牛原十万山B 9号住居址出土銅鏃



扁牛原十万山B 2号住居址出土土器  
右より甕・小型壺・高杯



扁牛原十万山B 9号住居址出土高杯脚部



扁牛原十万山B出土弥生後期の石器  
右 上より1住・5住・9住 左上2住、左下と中13住



図版IV 発掘スナップ



調査にかかる



B1号住居址の調査



B1号・2号住居址の調査



B13号住居址の集中調査

## 調 査 組 織

### 1. 十万山遺跡発掘調査委員会

下 平 真 広	喬木村教育委員会委員長
下 岡 輝 男	喬木村教育長
宮 下 孝 恵	喬木村教育委員
本 間 孝 佐	"
小 池 敬 次	"
原 五 郎	喬木村文化財保護委員
林 雅 夫	畑牛原農業構造改善実行委員長
木 下 和 市	" 副委員長
大 平 清 光	" "

### 調 査 団

團 長	佐 藤 魁 信
調査員	吉 沢 輝 人

### 3. 指 導 者

大 沢 夫	長野県考古学会会長
矢 亀 勝 俊	下伊那地質誌編集委員会会長
今 村 善 興	長野県教育委員会文化保護指導主事

### 4. 事 務 局

下 岡 理 則	喬木村教育委員会総務係長
田 中 君 子	" 社会教育係

### 5. 作 業 員

新 井 千 広	池 田 隆 雄	大 平 房 人	溝 呂 木 修 栄
平 沢 稔	北 島 喬 二	宮 下 元 治	原 三 行
吉 川 弥 生	柳 沢 八重子	福 島 明 夫	北 村 重 光
中 平 兼 茂	牧 内 佳 子	内 山 順 一	平 栗 光 司
大 平 あ や	大 平 ミサヲ	下 平 園 江	宮 下 義 広
原 史 樹			

### 6. 遺物整理・製図

佐 藤 いなゑ	田 口 さなゑ	牧 内 佳 子
---------	---------	---------

## お わ り に

激動する社会情勢の中で農業の近代化を図る第2次農業構造改善事業が、昭和51・52年度に亘り埴原地区で実施されることになりましたので、昭和51年度においては城本屋遺跡を中心にして発掘調査を実施し、長い期間に亘って生活されたとされる複雑な複合住居址が多量に確認され、之に付随した出土品の量は夥しい量があり大きな成果を収めました。

第2年度に入った52年度には、造成地域の基盤整備が実施されるのに先立って、十万山地区の発掘について役場産業課と協議し、県教委文化課の指導を受けて発掘計画を立案し、昭和52年11月5日より11月22日の間14日間を費して調査を実施しました。

この調査は、前年農業構造改善事業の発掘調査費を城本屋遺跡に集中投入した為、調査費の補助がないので全額村費を当てたことと伊久間原畑地帯総合整備事業の実施に先立っての発掘調査の合間をぬっての調査であり、忙しい毎日でありました。

調査地は桑園地帯を造成して果樹団地にする事業であり、桑株抜根等は機械力を導入して向寒の中で実施しました。特に土地所有者である元鳥惣助・大平幸吉の両氏には、大変ご理解とご協力を頂いたことを厚く御礼申し上げます。

今回の調査で埴原遺跡が、昨年の城本屋地区に続いて同じ地区内の十万山地区が解明され、その全容が把握できたことは大変意義深いものと思います。

調査作業については、日照時間の短かい11月下旬にかけての向寒の中で、団長佐藤勉信先生、調査員吉沢輝人先生を始め作業員が懸命の努力をされ、県考古学会会長大沢和夫先生、地質学の矢龜勝俊先生、県教委文化課指導主事今村善典先生の適切なご指導により調査を行ない、特に出土品整理、報告書作成については、調査団長の佐藤先生ご夫妻のご努力により調査を完了したものであり、各位に対し衷心より敬意と御礼を申上げる次第であります。

出土品については、関係各官庁に届出を終り、竣工した喬木村歴史民俗資料館に保管展示中であります。

昭和54年11月

喬木村教育委員会

---

## 帰牛原遺跡十萬山地区

—縄文中期・弥生後期の集落を中心とした—

埋蔵文化財発掘調査報告書

1979. 11.

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

---

印刷 長野県飯田市通り町1丁目  
株式会社 秀文社